

## 1. 本研究の位置づけ

言語社会学、すなわち sociology of language というが、主に世の中の言語変種と言語の使用者をめぐる科学である。フィッシュマン (1974) の理論によると、言語社会学とは主として言語行動の構造を研究する。言語社会学は言語使用そのものだけでなく、言語使用者の言語への態度や言語及び言語使用者に対する顕在的行動を含めて対象とする。言語社会学の分野については、杜学増 (2012) によると「二言語、多言語現象」、「二言語制」、「言語への忠誠 (language loyalty)」、「言語レパートリー (verbal repertoire)」、「言語コードの切り替え (code-switching)」、「言語計画 (language planning)」、「言語発展 (language development)」、「言語維持 (language maintenance)」、「言語コントロール (language control)」、「言語接触 (language in contact)」等のような重要な領域、あるいは課題がある。本研究は特に「二言語、多言語現象」、「言語接触」、「言語計画」、「言語コードの切り替え」、「言語発展」、「言語維持」と関連する。

本研究では言語生活を言語行動と言語意識の二つの視点でとらえている。杉戸 (1992) の理論に基づき、言語行動を「言語行動の種類や姿そのものへの視点」と「言語行動の構成要素への視点」、言語意識を「評価・言語感覚としての意識」「現状認識としての意識」「信念としての意識と規範への意識」から見ていく。

現代の日本の言語生活の状況については、佐藤・米田 (1999) によると、日本人の方言や共通語 (標準語) に対する意識の変遷が認められ、方言と共通語 (標準語) の使い分けの歴史は三つの時期に分けられる。まず、1960 年代以前の「第Ⅰ期：方言撲滅期」、次に 1970 年代から 80 年代にかけての 20 年間「第Ⅱ期：方言の再発見期」、最後が 90 年代の「第Ⅲ期：方言と共通語の共生期」である。日本では 90 年代以降、言語運用事情に関する研究活動が盛んに行われている。特に日本全国の 14 地点の方言使用地域で行われた言語意識調査の結果として、日本の方言使用地域が「方言主流社会」と「共通語中心社会」に分けられた (佐藤・米田 1999)。日本のこのような言語意識調査は本研究の展開と実地調査にも指導的な役割を果たす。

次に、中国の言語事情について、近現代における共通語と方言に関わる近年の社会言語学的研究調査とについて二つの面から述べる。共通語と方言の歴史については、于根元 (1996) によると、中国の普通話普及政策の実施はほぼ 5 つの段階に分けられる。それぞれ「1955 年までの準備期」「1955 年から 1966 年までの発展期」「1966 年から十年の停滞期」「改革開放から 1986 年までの回復期」「1986 年から今までの再発展期」である。中国建国以降の普通話化の諸相については、王宇楓 (2006)・曹志耕 (2006)・丁崇明 (2006) の研究があげられる。王・曹・丁によると、中国の普通話化の様相は、方言が普通話の方向に変わっていく変化と、劣勢方言が優勢方言の方向に変わっていく変化という二種類に分けられる。

中国の言語運用事情調査は、1924 年に北京大学の方言調査会の成立を皮切りに純粹の方言そのものへの調査が始められた。数十年を経て、80 年代に社会言語学が中国に入るに従って、社会言語学的調査に変身してきた。社会言語学的研究調査の例として、陳於華 (2005) の研究があげられる。

## 2. 調査地域と仮説モデル

まず、本研究の研究対象である中国の呉方言地域について、方言区画論と呉方言地区・呉

方言の独自性から説明する。方言区画において、J.L.ノーマン（1988）の漢語方言区画論（概念図1参照）においては、「北方方言区」、「中部方言区」、「南方方言区」に分けられるが、呉方言地域は中部方言区に位置する。中部方言区は地理的には、北方方言区と南方方言区に挟まれており、北方方言区の方言（官話）と南方方言区の方言（非官話方言）から影響を受けている。特に南方方言区と同じく非官話方言区の中部方言区は、南方方言区より官話方言に強く影響されており、この地域の方言が危機言語になる可能性が高いと思われる。一方で、官話方言区からの影響度からみていくと、中部方言区の内部にも差異が存在する。特に呉方言地区は湘方言区・贛方言区と比べて、官話方言区からの影響がもっとも小さい地区だと思われる。加えて、長江デルタ地域に位置する呉方言地域は、他の二つの地区より強い地域活力を持つ。

次に、言語意識の仮説モデルとして、本研究は共通語化の観点から出発し、以下のような四種類（概念図2参照）に分ける。

① 共通語使用向心型

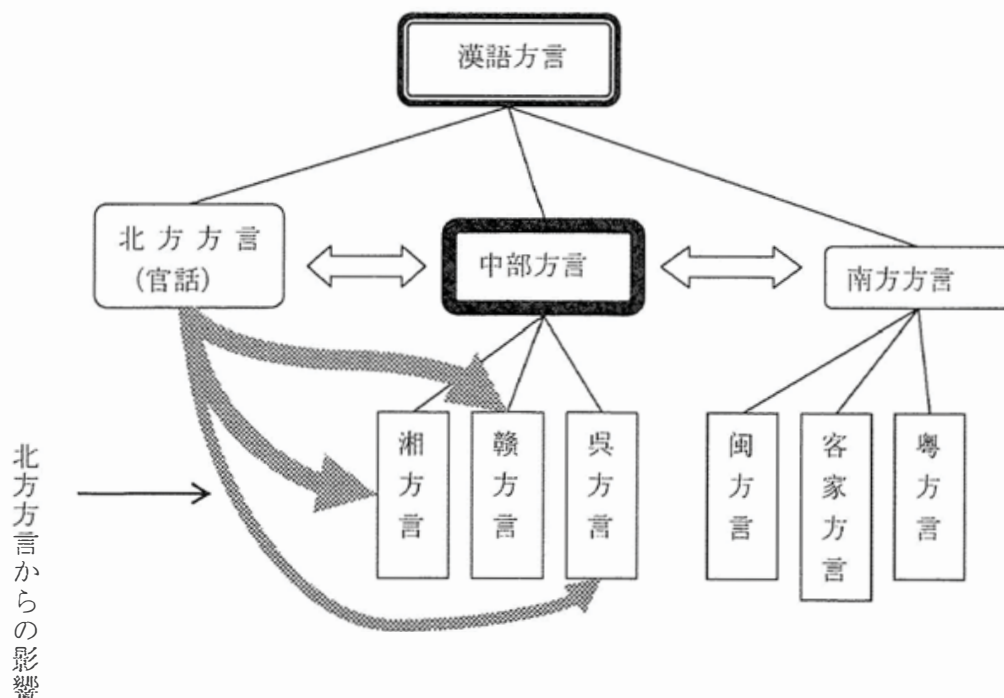
どちらかという共通語のほうを愛用し、積極的に共通語を使っている、あるいは積極的に使用しようとしている型である。

② 方言使用向心型

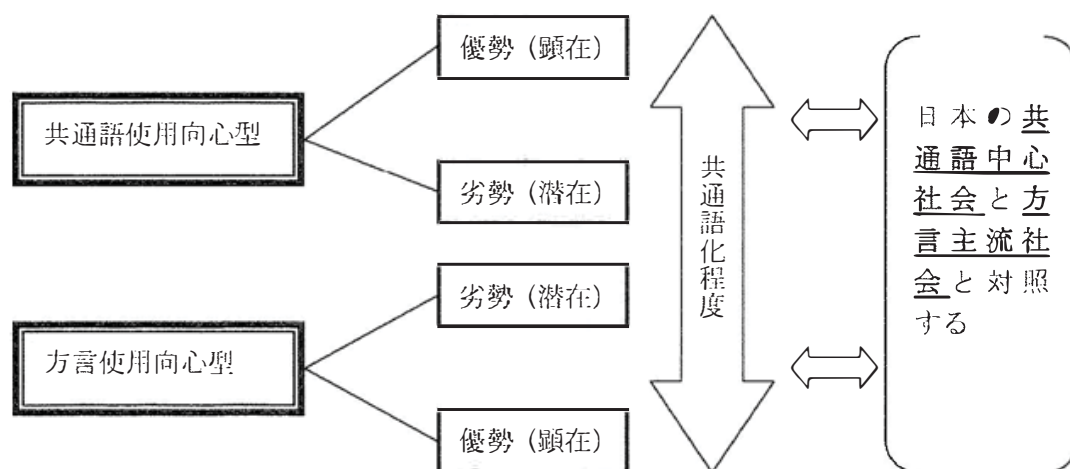
どちらかという方言のほうを愛用し、積極的に方言を使っている、あるいは積極的に使用しようとしている型である。

加えて、この二つの型はそれぞれまた優性（顕在）と劣性（潜在）と二種類に分けられる。優性共通語使用向心型は、突出して共通語を使用する型を指す。劣性共通語使用向心型は、表にははっきりとしていないが、意識上、行動上、方言に対して消極的な態度を持ち、積極的に共通語を使用している、または使用しようとしている。逆に、劣性方言使用向心型は、表にははっきりとしていないが、意識上、行動上、共通語に対して消極的な態度を持ち、積極的に方言を使用している、または使用しようとしている。優性方言使用向心型とは、突出して方言を使用する型を指す。

概念図1



概念図 2



### 3. 寧波における言語実態調査

調査は質問紙法によるアンケート調査のかたちで、試行調査から再調査を経て、約三ヶ月をかけて 10 代 20 代、30 代 40 代、50 代以上の三世代に分けて実施した。各年代の被調査者の内訳を出身地や生育地により集計すると、10 代 20 代は 43 人のネイティブと 7 人のノンネイティブからなっている。30 代 40 代は 37 人のネイティブと 13 人のノンネイティブからなっている。50 代以上は 42 人のネイティブと 8 人のノンネイティブからなっている。

アンケート調査実施地である寧波市は呉方言地域にある浙江省の東部に位置する副省級市であり、長江デルタ経済圏の一部でもある。寧波は古い歴史を誇り、国家歴史文化名城にも指定されている。その他また有名な港灣都市でもあり、商工業が発達していて、地域間の人口流動もとりわけ目立つ。

言語生活面において寧波を見ると、まず寧波は呉方言使用地である。同じく経済力の強い呉方言地域にある他の都市と比べると、寧波は独自性を持つ。地域において影響力、経済的潜在力が相当であっても、寧波は、あるいは寧波の地域ことばは相当の程度まで独立している。このような地域の構成員の送っている言語生活を通じて、呉方言地域全般の言語生活を見ることができなくても、その一端を客観的に捉えることができると思われる。

#### 3.1. 地域意識とことばイメージ

##### 1) 地域意識と地域イメージ

地域意識を調査するために、今回の調査の項目の中に「あなたは寧波が好きですか、嫌いですか」という質問を設定した。地域イメージ（地域とこの地域出身の人に対するイメージ）調査は、地域イメージについて 20 の評価語に関して、それぞれ「とても思う」「やや思う」「そうは思わない」「なんとも思わない」の選択肢を設定した。具体的なデータは紙幅の制約のため省略するが、調査の結果は以下のようにまとめることができる。

- 寧波に対して、ネイティブはもとより、ノンネイティブも高い好感度を持つ。
- ノンネイティブは年齢が上がるにつれて、寧波に対する好感度が低くなる傾向がある。
- 寧波の都市イメージにおいても、ネイティブはもとより、ノンネイティブも高評価

している。

- 寧波の都市イメージについて、ネイティブは三年層の差が小さく安定しているが、ノンネイティブは年齢が上がるにつれて評価が低くなる傾向を示している。

## 2) 使用可能言語

ネイティブのことばの好悪を調査する前に、まず寧波で生まれ育った人々の使用可能言語について尋ねた。調査の結果は、年齢が低いほど方言使用能力が低く普通話使用能力が高い傾向(年齢が高いほど方言使用能力が高く普通話使用能力が低い傾向)を示している。陳於華(2005)の90年代に福州・広州・香港で行なった調査の結果と比べてみると、寧波は福州と広州の中間の状況であることがわかった。まず、普通話使用能力について全般的に見ると、寧波は広州に近い。寧波ネイティブの方言使用能力は数値だけで見てみると、福建省より高く、広州の普通話使用能力に近い。だが、方言使用能力について、寧波のネイティブは広州のように100%の人が方言が使えるとはいえない。陳(2005)によると、広州と香港では、大半の人が標準語は話せるものの、依然として地域方言を強く保持している。福州では、方言から標準語へのシフトが進んでいる。したがって、寧波では、地域方言を相対的に強く保持している一方、方言から標準語へのシフトもある程度で進んでいるといえよう。

## 3) ことばの好悪

寧波弁に対して、高年層が一番高い好感度を持つ。活躍年層は寧波弁に対して、他の年層より低い好感度を持つ。ネイティブと比べると、ノンネイティブの寧波弁に対する好感度が低く特に30代40代はかなり低い好感度を持つ。

普通話に対して、ネイティブとノンネイティブは両方とも高い好感度を示している。ネイティブにおいては、普通話より方言のほうが好きであるように見える50代に対して、30代40代や10代20代のネイティブは方言よりも普通話のほうが好きであるという傾向がある。特に30代40代は突出して普通話好感度が方言好感度より高い。

## 4) ことばのイメージ

ネイティブは寧波弁を普通話と同じように「良い言葉」「きれい」「表現が豊か」「親しみやすい」「素朴」「味がある」「おだやか」「感情的」「使いやすい」と捉え、どちらのことばについてもプラス評価をしており、ノンネイティブとの意識の違いが見られる。つまり、寧波ネイティブにとって、寧波弁はイコール「普通話」ではないまでも、「方言」的特徴をもたないことばという意識で捉えられているようである。すなわち、寧波ネイティブの自分のことばへの評価から見えていくと、寧波弁はある程度、非方言的方言な存在だと認められている。つまり、地域共通語としての性格がしっかりと認められている。ネイティブと比べると、ノンネイティブの場合は、ことばの好悪と同じように寧波弁イメージに対する評価が低い。寧波弁イメージと普通話イメージの差が目立つ。これは、ある程度、寧波弁はノンネイティブから煙たがられているといえよう。

## 3.2. 調査対象の言語使用状況

調査対象の言語使用状況は「ことばの使用能力と自信度」「ことばの手本」からみていく。

### 1) ことば使用能力と自信度

方言の使用能力の調査で、年齢が下がるにつれて方言の使用能力(方言自信度)が低くなり、普通話の使用能力(普通話自信度)が高くなる傾向があることがわかった。

調査対象の中で、「うまく話せる」と回答した者以外、つまり、相対的に使用能力、自信度の低い人は「大体話せるが、アクセントやイントネーションなどがずれているところ

がある」(28%)に集中している。年齢が上がるにつれて方言アクセントの影響(その影響の意識)も強くなる傾向があり、普通話に自信の少ない人は自分の普通話に方言アクセントやイントネーション(方言発音、方言語彙)が混ざっていることを意識していることがわかった。

方言アクセントに対して、三年層とも半分以上の人が方言アクセントのある普通話に対して、地方の文化が感じられるからとても面白いと感じている。一方、実際の言語生活の中で、方言アクセントによる不便も確かに存在する。特に10代20代と50代以上の中で、「恥ずかしい」「直したい」と思う人もいる。10代20代は方言より普通話のほうが好きであるため、この結果はある程度予想のできたところである。しかし、普通話より方言のほうが好きである50代以上の人の中で「恥ずかしい」「直したい」と思う人もいる。つまり、50代以上の方は、方言コンプレックスを持つ。そのほか、「普通話が学びたいか」の質問に対して、高年層の答えから、普通話が話せない悩みや方言コンプレックスを持つ一方、普通話に反発する一面もあることが読み取れた。

## 2) ことばの手本

寧波弁手本の調査の結果によると、各手本の中で上位三位の項目は三年層とも「親」「親戚」「友人」となっている。つまり、主に家族の人や友人を通じて寧波弁を習得する。あるいは、寧波弁が最も使われている場合は、家族や友人と一緒にいる(話す)場合であるともいえよう。特に10代20代の方は「親」「親戚」「友人」は80%以上も占めている。他の項目の比率をみても、年齢が上がるにつれて比率が上がる傾向がある。つまり、年齢が上がるにつれて、生活場面での方言使用も多くなるともいえよう。寧波弁手本と比べると、普通話手本の中で、「親」と「親戚」の比率は年齢が下がるにつれて高くなる傾向を示している。特に10代20代の方は「親」の比率が「学校」の次に多い。つまり、若い世代では家族内の普通話使用も頻繁になっているともいえよう。50代以上で、普通話の手本は主に「テレビ・ラジオ」「学校」「職場」がある。つまり、高年層にとって、普通話習得、あるいは普通話と接触機会の最も多い場面はこの三つの場合である。30代40代では、「学校」という答えが突出して多い。三年層の中で、特に10代20代は各普通話手本の差は大きくない。つまり、日常生活の中で普通話習得や普通話との接触は頻繁に幅広く発生している。

寧波弁の各手本と比べてみると、若い世代は普通話生活が方言生活よりも安定しているようにみえる。これは、若い世代の言語生活で、普通話が方言に取って代わるという「共通語化」がますます進んでいることの現れでもある。

## 3.3. 寧波ネイティブの言語生活

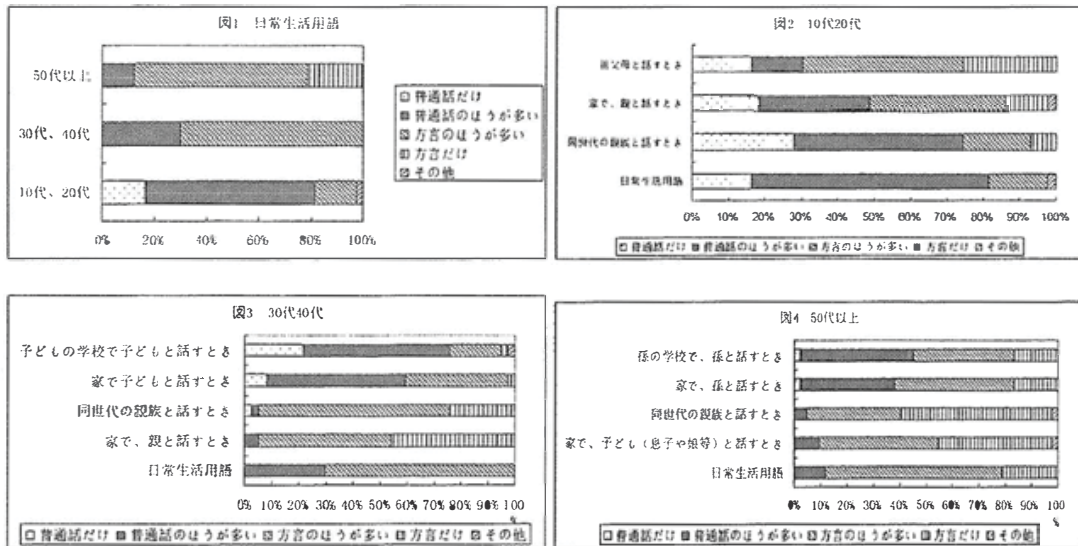
各年層の言語生活の具体相を探るために、さらに進んで、内と外という二つの面からみていく。「内」は最も基本的な言語使用領域(ドメイン)である家族を指す。「外」は社会活動する場合である、様々な場面が想定される。調査から得た結果は以下のようにまとめることができる。

### 1) 全般の日常言語生活(データ図1参照)

- 年齢が下がるにつれて「普通話のほうが多い」と答えた人が多くなる傾向がある。
- 50代以上の方は主に方言で生活している。
- 30代40代の方は50代以上の人と同様に、日常言語生活は主に方言に支えられているが、普通話から大きい影響を受けている。
- 若年層の日常言語生活の中心はもうすでに普通話に移行した。

### 2) 家庭内言語生活(データ図2~4参照)

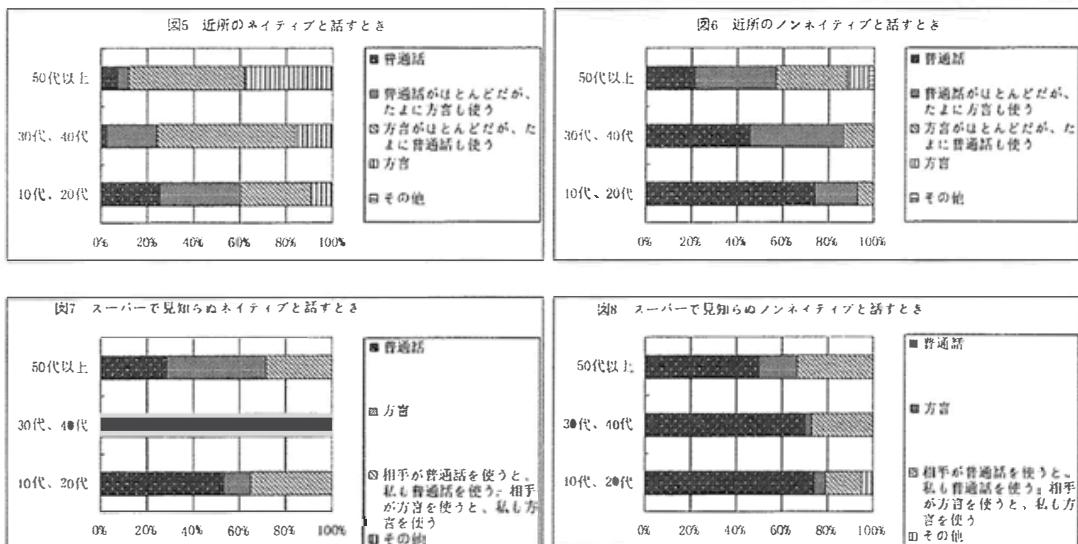
- 10代20代の方は家族内で、話し相手の年齢が下がるにつれて方言の使用が少なくなり、普通話を多用する傾向がある。
- 寧波ネイティブの活躍層と高齢層が一緒にいるときの言語生活では、方言がまだゆずれない中心である。
- しっかりと方言中心生活を送っている50代と比べて、30代40代の方言中心生活は少し揺れている。

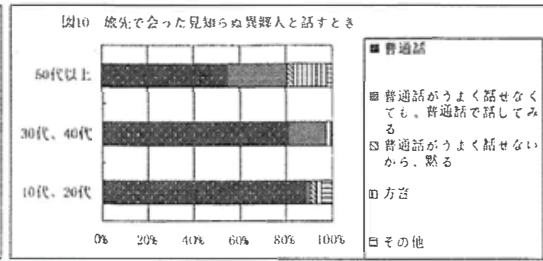
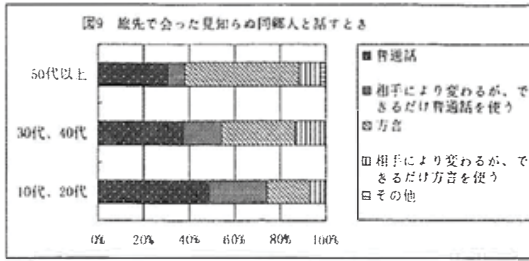


### 3.4. 場面意識からみる寧波ネイティブの言語生活

#### 1) 外での日常生活

「外での日常生活」とは、日常生活で家族以外の人と接触するときを指す。今回の調査で三つの場面を選び調べてみた。それぞれ「近所の人と話すとき」「スーパーで買い物するとき」「旅先（寧波以外のところ）で会った人と話すとき」となっている（データ図5～10参照）。



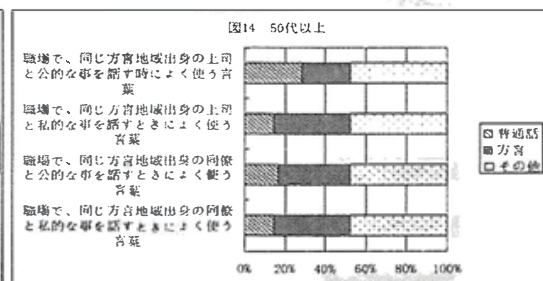
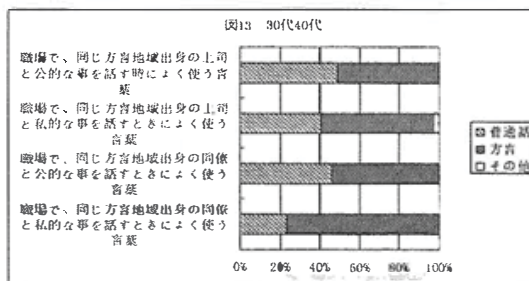
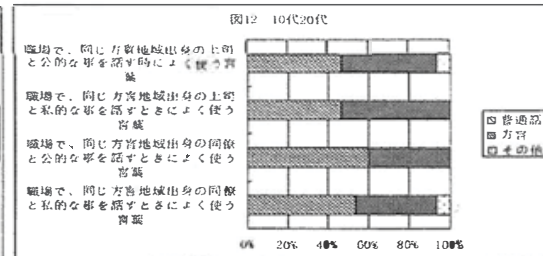
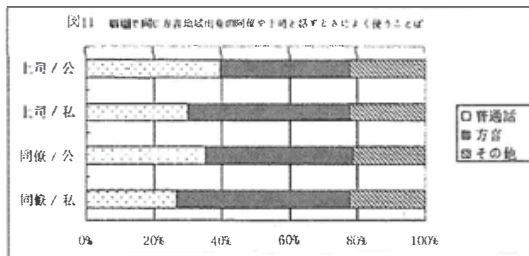


この三つの場面での普通話と方言の使用状況を調べた結果から、寧波ネイティブが近所のネイティブと話すとき、普通話も使うが基本的に方言を多用することが見て取れる。一方、場面が家を離れれば、話し相手が知り合いから見知らぬ人に、あるいはネイティブからノンネイティブに変われば、方言を控え普通話を使用するようになる傾向、すなわち方言から普通話へのシフトが強まる。

年齢別に見ると、高年齢の50代以上の方は、外に出ると、話し相手の状況、言語背景に合わせて普通話と方言を使い分けている。家族内のようにしっかりと方言中心生活を送っていないが、ある程度で方言への執着心を持っている。50代以上の人の中で意思疎通のために普通話を使う人が少なくない。30代40代では、家庭内で50代以上のようにしっかりとしていないが、ある程度方言中心に過ごしている姿を見せている。しかし、外に出ると、方言への執着が崩れていて、場合により方言の使用を控え、方言から普通話へのシフトの進行が目立つようになる。若年層の10代20代では、家族内の生活も、外での言語生活の中心もどちらも普通話中心となっている。

## 2) 職場での方言と共通語（普通話）の使い分け実態

職場は近所やスーパー、旅先と比べると、相対的に改まった場合である。「職場で同じ方言地域出身の同僚や上司と話すときによく使うことば」を尋ねてみた（データ図 11～14）。



寧波ネイティブは職場で、話しの内容が私的な事から公的な事に変わるにつれて、方言を控え普通話を多用するようになる傾向がある。同様に、話し相手が同僚から上司に変わるにつれて、普通話の使用が多くなる傾向もある。つまり、フォーマルな場面で、あるいはフォーマルの話題について話すとき、普通話が高位の変種として機能していると寧波ネ

イティブに認められているといえよう。だが、全体的にみると、職場で同じ方言地域出身の人に対して、方言が普通話より少し頻繁使用されるように見える。

外での日常生活を年代別に見ると、以下のような結果を得た。50代以上と30代40代は、職場でネイティブと話すときに普通話より方言のほうをよく使っている。50代以上の方は普通話が公用語だという意識を持つが、実際の言語活動ではこのような意識に大きく左右されていない。30代40代は職場で普通話を高位の変種だと認識している。10代20代には、このような話し相手との親疎・上下関係や、場面や話題のフォーマル度による方言と普通話の使い分けの特徴はあまりない。一方で、寧波ネイティブの10代20代は、ある程度用事を円滑に済ませ、より親しい人間関係を築くために、上司に対して方言を多用する一面も持つ。

調査結果を陳於華（2005）の90年代に行なった南三地域での調査と比べてみると、寧波は福州のように、普通話が完全に高位変種、地域の主流言語とはなっていない。一方、90年代の広州や香港と比べると、寧波の人が積極的に普通話を使っているように見える。

### 3.5. 方言存続意識

方言存続意識を調査するために、「方言を後世に残したいか」「ノンネイティブが方言を勉強する必要があると思うか」を尋ねてみた。

寧波の方は方言を後世に残しておく必要があると考える人がかなりおり、方言を存続させる意識を強く持っているようである。寧波ネイティブは寧波方言をただ化石的に残しておきたいと思っているだけではなく、自分の子孫や外来者のことばとしても取り入れ、普通話との共存も希望する。しかし、方言への愛着は高年層が一番強く持っているが、若い世代になると方言への愛着が薄くなる傾向がある。

寧波ネイティブは、地元の方言を愛着し高評価していて、方言の価値や存在意義を強く認め、方言を存続させようと強く意識している。しかし、実際の言語生活、言語実践となると、普通話の必要性を益々強く意識し、方言の使用を抑制し、普通話を使うようになり、普通話使用度が高まる傾向も目立つ。10代20代、30代40代はもとより、普通話の使用が最も消極的である50代以上の方も普通話が必要だと思い、普通話を高位変種と捉えている。結論をいうと、寧波の共通語化の程度は共通語使用向心型の劣勢に近い状態となっている。つまり、意識上、行動上、方言に対して消極的な態度を持ち、積極的に共通語を使用しようとする傾向である。

## 4. 結論

寧波地域の共通語化の程度は共通語使用向心型を呈している。年齢層別にみると、高年層だけがまだ方言に執着し、意思疎通のためだけに普通話を使用するという方言中心生活を送っている。活躍年層は、家庭内で方言を主要言語として使っているが、外に出ると、または家族内の若年層と接触するとき、普通話と方言を場面によって使い分ける意識が顕著になっている。若年層になると、言語生活の中心が普通話に移行し、日常生活での方言の使用がますます減少していく。この状況が続くと、寧波弁の話者が少なくなることが予測される。そして、いずれはその話者の減少が言語使用にも影響を与えていく。つまり、今後、寧波弁は普通話と使い分けられ、共存の段階を経て、自発的な発展と変化が制約され、将来ほとんど普通話に置き換えられてしまうのではないかとと思われる。

以上のような言語意識の変容は寧波だけではなく、呉方言全域にわたって存在していると思われる。特に、近年の市場経済の発達による地域間の人口移動の増大は、呉方言地域における共通語化を促す要因として顕在化しつつある。とりわけ、外来人口の急増は呉方



言地域の人々の言語生活に影響を及ぼし、普通話の使用が日常化されつつある。

だが、半沢康（1999）によると、都市化が進行し経済水準が上昇したからといって、そのような地域で必ず方言が衰退し、共通語中心社会へと移行するというわけではなさそうである。特に上海の人は方言に自分のアイデンティティを見出し、方言を上海人のラベルと見なし、方言のできることに誇りを持つ人も少なくないようである。そのため、西日本の福岡や京都のことばのように、上海のことばは存在意義が強く認識される可能性も高い。したがって、上海で方言が普通話と使い分けられ、根強く共通語と共存していくことも予想される。そのほか、官話地域と隣接する呉方言地域北部とか、方言が官話的色彩を持つ杭州のような地域でも、寧波とは違った独自性を必ず呈示するだろう。

参考文献：

- 佐藤和之・米田正人（1999）『どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ』大修館書店。  
杉戸清樹（1992）「言語行動」『社会言語学』桜楓社。  
杉戸清樹（1992）「言語意識」『社会言語学』桜楓社。  
半沢康（1999）「言語意識と言語行動—地域経済と方言意識」『どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ』大修館書店。  
フィッシュマン・J（1974）『言語社会学入門』（湯川恭敏 訳）大修館書店。  
曹志耕（2006）「论方言岛的消亡—以吴徽语区为例」『语言规划的理论与实践—第四届全国社会语言学学术研讨会论文集』語文出版社。  
陳於華（2005）『中国の地域社会と標準語—南中国を中心に』三元社。  
丁崇明（2006）「保护方言、防止方言的快速同化」『语言规划的理论与实践—第四届全国社会语言学学术研讨会论文集』語文出版社。  
杜学增（2012）『语言使用的社会文化变异—社会语言学的视角和方法』世界知識出版社。  
王宇楓（2006）「从集宁“方言普通话”使用的三个阶段看普通话的推广」『语言规划的理论与实践—第四届全国社会语言学学术研讨会论文集』語文出版社。  
于根元（1996）『二十世纪中国语言学丛书—二十世纪的中国语言应用研究』書海出版社。  
Jerry Norman(1988)Chinese. ノーマン J.L（1995）『漢語概説』張慧英訳、語文出版社。